

八月七日

地下は学生が休みに入り静かになった。スタッフだけが仕事をしている普通の状態に戻った。院生の中で一人モノになりそうな奴がいて、今日からキチンと育ててみようと思っている。

昨夜は六時から学会で東大の松村秀一を中心にしたグループが提出していた文部省科研費が内定したので会合が持たれた。要するに都市に発生しつつある使われないオフィスビルを住居に代えてゆこうとする計画で、これからの時代の中心的なテーマだ。三年がかりの研究で面白くやれそうだ。港区長の原田敬美氏も委員として参画しており、何とか三年間でモデル計画を実現する糸口をつかみたいものだ。ブラジルのサンパウロ市で体験した都市の中心部の空洞化が東京大阪でも起こりつつあるわけで、計画という生産的概念がすでに修正せざるを得ない現実を物語っている。一日どんよりとした曇天で、この家で暮していると空の状態と気分が重なり合ってくるから不思議である。

八月八日

朝六時屋上菜園に上る。ナスが充分大きく実っていた。カラスがスキあらば侵入してやろうという跡がいたるところにあつて、油断ならぬ。しかし育ちつつある野菜のそばにうづくまっついていると気持ちが安らぐのが我ながら照れてしまう。年のせいではなければ良いのだが。昔から原っぱ状態が好きだった。ペンペン草が生い

茂る原っぱに錆びたドラムカンが捨てられていて、何故か月見草がポツカリ花を咲かせている。誰もいない。風が吹いている、そんな風景である。蒸気機関車に代表される古い機械を懐かしむのとは少しちがう。もう少し何も無い状態。

モヘンジョダロの遺跡の風景はそれに近かったがあそこは何も無さ過ぎた。ナールンダは建築の残ガイがハッキリ残り過ぎて、ヒンズーの寺院の遺跡にはそれが無い。人の匂いが満ちている。仏教寺院の遺跡のなにがしかにはそれに近いモノが在るように思うがよくわからないママに時が過ぎていく。多分、わたしの「地」なのだろうと思うがそれを突きとめてゆくとチヨツとヤバそうなどころに行きそうなのでとまどっている。今秋の「阿弥陀の径」でアジア最奥の地にでかけるが、それが原っぱ状態を考える関門になってしまふのではないか。

好ましいと思う状態に脈絡があり続けるのならそれは考えてみる必要がある。

午前中大学で研究室の公開プロジェクトのウェブサイトの編集作業。ウェブサイト用情報は段階的に降下してゆく感じが必要で、フト考えてみれば一ノ関ベシー菅原正二のファックス文体はそれに適していると思われる。

早稲田バウハウススクールはそろそろ次の展開を考える時期にきた。毎年夏冬と有能な先生方に佐賀まで足を運んでもらうのも心苦しくなってきたからナア。ツインーマン、バウハウス大学学長からは非ワイメールに来て欲しいとの連絡が入っているが、その体力気力が今は無い。

午後G A 杉田君とヘレンケラー記念塔の発表に関して打合わせ。